

学 位 論 文 審 査 結 果 要 旨	主査：作業療法学分野教授 平山和美 副査：作業療法学分野特任教授 佐竹真次 副査：看護学分野教授 後藤順子
	<p>新規性・有効性</p> <p>就学前後の自閉スペクトラム症(ASD)児の多くが着替えを不得手とするが、着替え動作そのものの諸指標をアウトカムにして介入の効果を検討した研究はない。本研究では、感覚統合に関連する遊びに、ズボン履きに関連のある遊びを加えて行った作業療法(OT)の少数回の繰り返しが、立位でのズボン履き動作の改善につながるか否かを検討した。結果、これらの遊びがズボンを履く動作の多くの指標に持続的な改善効果を持つことが示唆された。また、その改善は足圧の中心(COP)の前後方向の総軌跡長と最大振幅および左右方向のCOP総軌跡長の減少として現れることが示された。一方、この介入は開眼での片足立ちには効果がなかった。改善が、片脚立位時の前屈姿勢の維持、遊脚動作、ズボンのウェストの両手での把持の順で起こることも示された。したがって、この介入が平衡機能の向上を介さずにズボン履き動作を持続的に改善させる可能性が示唆された。着衣動作の持続的な改善が、児が楽しんで参加できるOTにより達成できることを示した本研究の意義、貢献は大きいと考える。</p> <p>信頼性</p> <p>介入の方法は詳しく記載されており、追試可能である。OT介入前後に、開眼での片足立ちとズボンを履く動作とを行い、動作の違い、介入前後の違いにより比較している。介入前、介入中、介入後の解析は、足圧と荷重中心点(COP)に関する種々の指標、ビデオデータなどを用いて客観的かつ詳細に行われている。したがって、結果の信頼性は高いと考えられる。</p> <p>総評</p> <p>上記のように、博士論文に必要な要件をすべて十分に満たしている。また、口頭試問の際にも十分な論述、分かりやすい説明が行われた。以上より、審査者は一致して学位論文審査及び最終試験に合格であると判断した。</p>